

# まちの話題お届けします



## ● 高校生みらい会議

### 地域を超えた企画案を報告

**2/4** 綾部市ものづくり交流館で、高校生みらい会議最終報告会が開催されました。この事業は、京都府北部への移住・定住促進に取り組む地域連携事業の一環として、若者の故郷への関心や愛着をはぐくみ、将来的な人口流出抑制やUターンの促進につなげることを目的に、令和3年度から企画・実施されています。

「住むまち、通うまち、学校を越えて高校生が主役となってやってみよう」をテーマに、京都府北部の高校9校から20人の生徒が参加。報告会では、市町や学校の垣根を越えてグループに分かれ、また、実際に地域に向き「自分たちの考えたテーマはどうしたら実現できるか」について昨年7月から取り組んだ成果を報告しました。



企画案を発表する高校生たち

## ● みょうが祭

### 今年は「早生」が豊作

**2/10** みょうがの育ち具合でその年の稲作の豊作を占う伝統神事「みょうが祭」が、須代神社（明石）において明石区長や氏子総代をはじめ関係者出席のもと行われました。この神事は、明治30年代ころから始まったとされ、例年この時期に行われています。

神事では、境内の「みょうが田」に植えられた早生・中稲・晩稲の3つに区分けされた場所からみょうがの育ちを確認。今年は「早生」の育ちが目立っていました。



みょうが田をお見守り関係者の皆さん

## ● 第45回京都府民総合体育大会市町村対抗駅伝競走

### チームでゴールに届けたたすき



たすきを受けとり勢いよく走り出す2区の松本さん(左)と大松さん(右)

**2/12** 福知山市の御霊公園前をスタート、同市の三段池公園総合体育館前をゴールとする「第45回京都府民総合体育大会市町村対抗駅伝競走(31.4km/8区間)」が晴天のもと開催され、与謝野町から2チームが出場しました。

新型コロナウイルス感染症の影響で3年ぶりの開催となった本大会には、「市町村対抗の部」に21チーム、「市町村チャレンジの部」に8チームが出場。市町村対抗の部は、4区の河原林さんが区間3位の力走を見せるなど1時間47分04秒で11位。また、チャレンジの部においても懸命にたすきをつなぎ、1時間53分16秒で6位という成績を残してくれました。アンカーをつとめた松尾さんと安見さんは「新型コロナ感染やケガもあったが、子どもから大人までチームとしてゴールまでたすきを届けることができた。来年は良い成績が残せるように頑張りたい」と振り返ってくれました。



ゴールテープを切る松尾さん

### 出場選手の皆さん(敬称略)

第1区	さき ぎかずよ 佐々木和代(明石)	みかみ ゆめ 三上優芽(幾地)
第2区	まつもと ももな 松本桃奈(石川)	おおまつ 琉莉(岩滝)
第3区	ひらい じん 平井迅(四辻)	よしだ 雅広(幾地)
第4区	かわら ぼやしほる 河原林遼(四辻)	たむら 悠惺(岩滝)
第5区	こいけ せんじゅ 小池千樹(上山田)	まさやま 功太(男山)
第6区	ふくい たく 福井楽(幾地)	ひろせ 捷太(下山田)
第7区	きざき ゆずき 木崎柚希(弓木)	やまうち 美歩(幾地)
第8区	まつお あきひろ 松尾哲裕(石川)	やすみ かずのり 安見一徳(上山田)

※ 市町村対抗の部(左)、市町村チャレンジの部(右)

誰かに影響を与えることができたことはうれしかった

ある日、突然「長谷川さんみたいになりたいです」と言ってくれた生徒

の実行委員会化」「よさの高校生広報室@みらい」など、仕掛けたことに対して反応やアクションがあったことの方が楽しさを感じました。その中で「何をやるかではなく、大事なのはそのあとの振り返り。自分たちが思ったことや気づいたことを言語化させることが大事」だと気づきました。



町長対話授業の様子

「今後の活動や挑戦したいことを教えてください。」

4月からは別の高校でコーディネーターを続ける予定です。この4年間、そのときどきでやりたいことをやってきましたが、「今の2年生が3年生になったときに、探究でどこまで実行できるかを見届けられないこと」が心残りです。

「コーディネーターとしての活動とおして、教育への考え方の探究が深まりましたし、自身の働き方やあり方について学びました。『生きる力を育みたい』『人の成長に関わっていききたい』という思いは今も変わっていません。今後は、小中高の一貫した学びづくりや大人の教育などの仕組みづくりに関わっていききたいと考えています。」

「徒がいました。めちゃくちゃうれしかったですね。それはコーディネーターになりましたというよりは、地域をつなぐ役割をしている、そんなことができる人がいるんだ」と気づいてくれたのかなと思っています。一人でも誰かに影響を与えることができたというのは、シンプルにうれしかったです。」

### 大きな功績を残した4年間

コーディネーター導入時、加悦谷高校の校長で、現在宮津天橋高校校長の深田聡さんに話を伺いました。

当時、加悦谷高校は宮津高校と統合し、全国初の学舎制を導入する「宮津天橋高校」としてスタートすることが決まっていた。文部科学省が進める探究として加悦谷高校では「地域を理解する」をテーマに実施していこうと考えていた中、与謝野町から「地域と高校をつなぐコーディネーターを登用したい」と話をいただきました。校長としては大いに歓迎すると同時に、高校の特色を出すためにどう活動してもらうかを考えていました。

学校にとって新型コロナはブレーキでしたが、コロナ禍において「できることは何か」をいろいろと考えてくれました。また、教員の中には、目の前の授業や生徒のことで手いっぱいになり、新しいことを導入するのにためらうこともありますが、長谷川さんがいたおかげで「それもありがたね」と振り返り向く教員が増えていきました。長谷川さんがいなければ、加悦谷学舎の探究はここまで大きくなっていません。長谷川さんの活動は、京丹後市へのコーディネーター導入のきっかけになったこと、また、他府県から視察に来られるまでの取り組みになるなど、大きな功績を残しました。

「最後に一言お願いします。加悦谷学舎では、4月から新たなコーディネーターのもとで高校魅力化事業を継続する予定と伺っています。この事業の大元は、地域に高校を残し発展させていくことです。そのために『地域に愛されて、地域の子どもたちが通いたいと思う学校づくりをしていく』、そこはブレてはいけない部分です。私の活動がすべてではなく、残るメリットと離れる

メリットがあります。4年間多くの種をまいたので、次のコーディネーターには私とは違う視点で取捨選択または改善し、加悦谷学舎に合ったかたちにしてほしいです。4年間、本当に「感謝」しかありません。加悦谷学舎は今、大きく変わろうとしています。地域の皆さんには「今の加悦谷を見て、知って、そして今通っている生徒を見てほしい」と思っています。」